宇治大納言物語　下　（天明六年版）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

宇治大納言物語　下

第
部

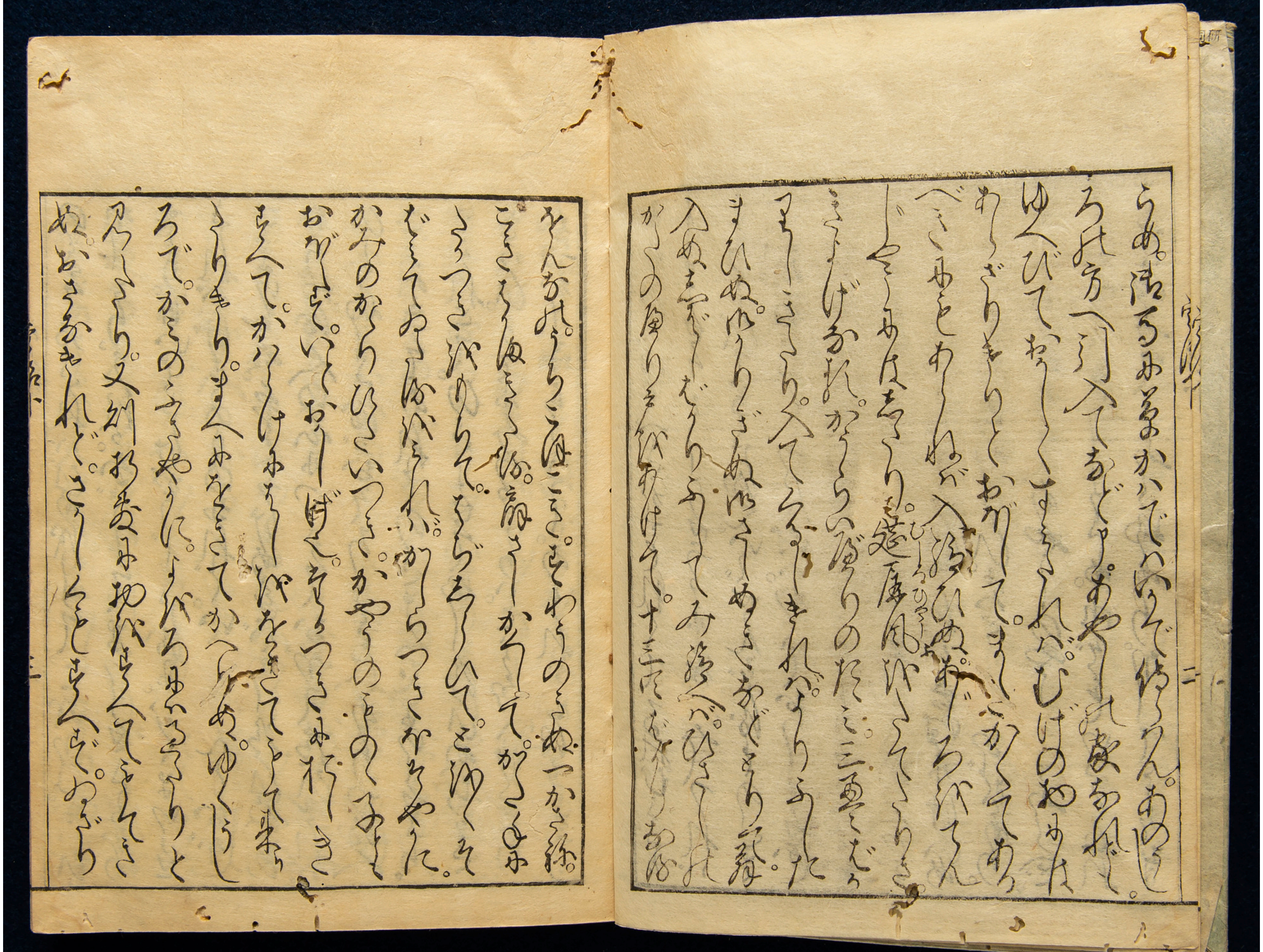
宇治大納言物語下一

いまはむかし。円融院のおとゞめでつござや人の侍。内舎人（さ禄り）よしかどやまたり。むかしは歌人ごとおほくへと。うとよりめでて成経ひきん。其内子に。さる蔵こや なに。さる蔵文のうと秘り成と。このとき経ひまれば。おしきらひけくより露代なんこのとき宝 けふと思ひとつるんて好まずなるべし。それならに おりしきら狩に。九月ばかりに小鷹狩におぼえぬ。ひしおのおいしてれ其代はうひめ給ふり。申時ばかりにかれらがりて大なる日より風ふき林なりければ。人々ほどもらせんとて

63B1176

むかう方に。みかとせられていぬ。此家にし
の方に。人此家のうちに。ゐるぞくしらせく
れつゝぬれごとにある。らし男一人なんゆきかゝち
いされ門のうちに入ていぬ。るに。ひ入てさ孫
まおとこしてけり。是ハ極楽にもさとうらかけて
れりしきらず。夜風まうら新ありておそろし
きれば。夜のまふべきやうとおかし。目とくれぬいふ
せんと。公ばそくおかしで為沙人なに。わ此に
嫁の粉衣（くりこぬ）襦（たふさ）きるは男此果で千じらな
れがいでさて。こハ何人のかくてハおりけれ
ぞといへば。鶏は乞ひに出らつなみかくなる

にあひて。ゆくべきかたもなくて。るすじさう
りまゐせそもしらせつるに。家此みてつれば
よろこびてきるゆゑ。いでせんぎばとのこゝま
へい義（おきみ）。ゐいてくふるんばいがてをりしませか
といひてる何（なに）の男れりてゐまりてたがお
りしまんぞてこひまいれば。あるくの人のだま
ちしまんなりとひまれば。甚河にけいぬ
いひてさりきうしゆゑにちがきあり。
とぞうありて。おやしの家みさまでざ。
らへでおうしまさめ。内ぞといひてぬれ
させ後みてさまる娘めりかりてまはぬ



らぬ。清水参かハでハいそぐらん。おのし
ろ。此方へ門へ入てあどや。おやしき家あれし
ゆくびて。おしくすまれバ。むげのおみハ
わざりきらしとおがして。ましかくてあら
べきやとわしねバ入給ひぬ。おどろかれてん
じやみはあらり。莚屏風（むしろびやうぶ）にそてこりき
きよげなれ。からいばりのたゝみ三畳ぞしき
ましきらへ入てみまれバよりふした
まひぬゆりさぬゆさしめきおどゝり給。
入ぬまじびろりふしてみ給へバひさしれ
かゝの屏りを給わけて。十三ばかりなる

そんなれ。うちこほここ。こそわりのこめ。一かさ給。
こきらぬ給。扇さしかくしてかゝるみ
さつき給りらそ。ちぢひてさゆくそ
だきておほ給ひれバ。かしらつきかそやた。
かみのかゝりひさいつきかやうのしのくまも
おがまぬ。いとおしげ。そゞろつきみだしき
まへでかしけなくじやうさてとて来ら
うりきり。まへみぬさてかへあゆくらし
ろで。かゝのこゝやうに。よびろまゐらりと
又さら。文机おなみ机ひくてとくそさ
ぬ。おきなかきれど。さしくとんぞ。おぼろ

のこそかゝれば。ひめゆびして。こぶしを。おやゆび
わしらう。れう。おなじしてまつしせうるわり
もり。目いとうけがうじくかみ。かくまいりせ
されべ。げそのうのあれど。いうくせんとおがし
てまつりぬ。我をとふけぬきばゞ。なりひなり。この
おりつゆ人のんひにつきそておがし。なりひきれば。
ひらかし。なりがおそろしきに。おりつゐ人
こゝゐきそあれとのこまで。まつせらる。
とられさて。いさゝせそ御しなりひめちらうき
まうひ。うそにみなもらいは。こゝあくけくかう
おつかしうらうきし。おそれにおばさて。かやう

のがれ姫めでたくいでゝうかくいわらんとおじま
くおがしなりまれば。まあくしく。ゆくまま
で此事にちぎりなりひきり。正月あれば。我を
おがなに。宮あまでくろまれど。おそれにおがし
のふまてみ。かへるそくちぎりのふ我をあけ
ぬれば。おのずからそて。たゞとのふさかはでかくこに
をさくれねて。ほめく親ひおろく。人にわ
たれども。人さへ事もなく。いかはらけて
おと隆じばくそくちぎりなれておなり
ひめ一ゐにのりそて。にて所ぞりおそれなり
給ふ。かれどもの人く。宮かしこより弱草

まで。さあひて後まじけりうつこひさば。
さて女房にかへり給ぬ。女房きのふおさせ給し
まれ。見て給ひし成やまんべいやかしつぶ事に
かしおげしありて。おくるとそきし人
いざしそそし君のまへ給ふ。おひれかられし
とおげして。みさかどにかつばありさらう
事あしき事く。我なにまかせて給つひ
ありきしば。こ女房けへし給へざりし
くべ。元とませてありきさ給ぬ。かつ給事
のあれいとられゐめしいまりかつばわ
つきさかせそとて給つひ給へば御めれでも

のへくと。この家はみで成めしらば。さづめべき
やうとれし。さ給りおとこハいはしゑやそおやき人
いぬ。まりなく立しくおもひせ給へど。人なき
べきやうとなし。月日ハたちぬれど。立しさいや
まさりゆて。ひにかゝらせ給ぬ村をながし。御よ
気にと成ぬ。女房をなくうせ給ひぬれば。お
ぢの為じつの父としふかくひをそてすごし給
へるが。おやとうせそ。なかそくおほく給まし出。
はみしへの立しくおがし給へば。めとまう
けてすごしのふかどもに。たまどりに成ぬ。
ゆめとふありしこ給り男。ゆるかうらのが

までまゐりしこゝろせはしくて。湯のめし
いで。かきせきしけさせおとせせはしさて
おまへらくまゐりくるゆ。此男に。一とせ夜やり
あつらし家は留守やとこひ給へ。いふておかし
さりぬとよまれば。姫としおかしくて。くみかいえ
こなんせふ。驚つりよめてわれとしおかせう
出そけれともゆへくらされなからめぐびつまし
くめしつきひをかいけて。わざの庭ごえ
ゆおちしぬ。日入かしてゆなんかしこにおもし
つきとりあ路々しきの中北十日のかし
なれば。まへかれ椋ところくちりて。尋る本

みなく。隠り水をむちりてながながくば。ばし
うあきれなり。あれしかどみらく入て。家を
のおとこめしおせぶ。おとりにみおしましる
がされさしにて。まじひかりしてまゐりくらお
まし人ハありやとさり申給へば。さつ嫁まし
やよろこびかし。おはせし所に入給へまた。
本てかくらにをさりかくれて。めぐらり月給之
ぢみしくらにこまれく給ひまゐりてわら
ぬわかめでくるる。かくりつにみ八つ六へむら
のかんおいみの。えとにはじめてさいてり。
これハそそこ。のくまくで。ちらうり嫁して

なくみやわらんとこゝまでは。ろくきうしく
なる事どもなきれば。なにえんはおぼして。平家ある
人やわがとめせば。又おのこまゐりめて。びざ
みやこりば。ひちごのおなば。これぞとゝいすへば
一とせおはしましつり涙。人のわかつり
まうりける事ともさかなりしば。おさなく候物
なれども。おもしましてかし給ひりてなれば
候てまれてさかしなりとしふを母。いつく
いよいくわすれぬ御ゆかり。まへつゞくゆれしだ。
ぬきし太刀わり。さいかくふかれちとうなり
まりしなかとじいよくわすれぬおぼし事か

ぎやうじかくて真観ぞまりて。又の日より
給ふ平家あるじがおやみるわんとおぼし
て。さらのふひもまくでば。平君のたまやうかくぞり
の給蓋とふひ給ふ。かくなおやしさ娘姫
おさでざくさぐきんのせのちざりこそすしめ
こおかりて。又此日むしろぞうりの車みさき
そぶれかけて。さらしひ二三人ざうりそうて
おちしぬ。車よせそ。此女のせ給ふ。むげみ人
おうんをわきれば。母ばめしいでゝのせるば
田すぢうりの女れさんばゆかば。そうおなどさ候し
でさやうのそのくめとみてさり。わらさのさ

ぬにかこきこめて幾ね。爰におりして。西の對
にえうしおろし給は。まさ人の方にめとを
隆しせ給ひば。大殿よりしやうらうでき。おの
こ子二人ともに。随んじおくおさし申人々
まんぐ。御にあまりあぐりのふ。大納言に御給
ひねば。姫君ハ。今の宮の院住にかゝりまいりけり。
女清にまいらせ給ふさそいくずくともおくて
醍醐の清門ハハうしこなまり給ひ。ともゝよりて。男
る二人ハ和泉の大殿とや。其年ハ二条の太政大臣
とまうし。おかちの太郎といやまんハ。四位に
御て刑部大輔に御なり給ふ。だいごの清
門院につかせ給ひければ。大納言ハ。内大臣になら
せ給ひめでたかりけり。やまんが家は。今の錦路是也。
むかしの東北といづつみに。かしこの家ハたう
ばさり。其寺ハ大隆け寺とて。あんじよし
いやまんが家のあらハ。おそれとおがみ申
やまりきん。だいごの清門の院さゝんハ。ちらく
せられけりとなん

いまはむかし。小松の清門の院ひ。清和天皇
のみこ。位につかせたまいで。小松の宮とて。御か
ひさしくまつりなくて。すぐさせ給ふ。
ざんもおいしまし。かひとうかしこくおはし

ませどもかひなかりし。御子三人おハしましけり。それ〳〵の[illegible]事なく。位につき[illegible]。[illegible]べき。[illegible]ありなんを御[illegible]きれバ。太郎の宮。御位をゆづられて。太[illegible]ありて。[illegible]の宮ハ十[illegible]。二郎ハ東宮の女御[illegible]。三郎[illegible]。

去程に陽成院位につかせ給ひて。物にくるハせたまひて。ふしぎのまつりごとハせさせ給へバ。さるべきかたなくて。関白基経[illegible]て。[illegible]せなんと歎きあひ給へどもかなハず。[illegible]て。くらゐハ[illegible]。猶に[illegible]させ。大猿など[illegible]かうて[illegible]たり。[illegible]木のかげさせまいて。うちころさせ給ひつ。[illegible]関白にて昭宣公なげきて。今ハさらなし。位をおろしまゐらせんとおぼして。さりぬ

べきかたら。まくらごと法門のはなしの。源氏に
成給へるおもしろく見ありさ給ふに。女達は心え
てうくわんとはくろひきしやさあひ給り。
つましくいらし給ひ。これをとよろし。是とよ
くとみしむぞとおかしくて。小松の女へまいりてしば
よさせ給へば。さこさせ給ひぬさて。あたしわり
て入なりて。とこにおさせ給りに。けさうしぬ
すふとおかしく給ふて。おはし給へるか。ふるあは許さ
びてはあやしくとこすまうにありにかわらき
まみて。何事にくらうし給ひうるでとて。
さのゝまひゆさぬるとよく。おかしまいれ。任
みつせ給ひさくんにかしくらくおかしましかん
さ見んなり給ひて。からくさやの人へは。いろいろ
と御せ給へば。給へはおもしくかくひぬへきれん。
わさて月ともく給ふ。其月よそ漢でもいぬ。
さて内にまいり給へまゐ。本めへはのかせて
こらころしきかはげうしてん〱笑。され
さしひ入ておうまんいぞおもし。おとぶ
すふいれくに給へも。らうべるのかんら
給よに。行安しして御あんぞてまうしやうのよ
いろしうまうこさせ給ひて。いつぞらうと給
子もば。おさてさや給へば。まろこびていう

かしましせのたまふ。其日に成ぬれば。かんだち殿
上人せうしまいりて。よしくつくしはべえり
さとめて。御衣をぬがるましきよし人々つかう
まつりて。陽成院といふはふに御悪しせて。おわ
しまりつ。さて後まで。地ぐらうしく人ばさん
ころきせ給て。世の失（うせ）給ひぬべければ。おろし
まいらせ給はんとしかけらるに。はゞかりせ給ひて
でかなしき事なりとて。をそろしくとおぼせし
まいらせ給。さて後ばて昭宣公はちじめ
なりて。百官つれて清盛ぐして小松のおとゞ
へまいりせ給ぬめり。めでたくいうしきは清盛しまさ
なにゝ給ふ世々のしぬとのはべりつり
こそのまうと仰られければ。おどろきせ給ひぬめを
の世をまりてさふらへども清盛はとてまいり
て仰せをりきせ給ふべきさ仰られきは。主人
のきうせ給て。悪法どもしくあしひとへんに。
わせくやんれ出うんど。わやうくおしておなの
悪ありとも。そのしせ給へりしとぞ。をせつき
てかねもみ。さて後につゝせ給ひて文覚の
ゆかふまくに。西国東国をもせたまへば。とろく
ゆてきりとおがしてはうし給りりけぎらまり。
宇治の院信にうせ給て。ぬぐまでそれはずう

みおこしまん。母上ときこえしハなかなかし世語ひてと。
此木丁のあぢり代目に一度とのかうんさみそ
たいひてめぐりわりし世語ひやうとや給た
また議にや。それハ小松内大臣なり。御身におて御代
らりかへ世語て。かくせねバ。からむつうしき
とそ。されバそらのさくあやし世語ひきりと
よ給へり

いまはむかし。国経の大納言といふ人おはしきり。
その妻にて在原の中納言といふ人のむすめ
なんえといひバかたちきよげにうつく
しくて。大納言ハ歳六十すぎ。北のかたハ二十に

たらざりめでておりしきらバいうしうもこめとこら
人めて。むさら人めでてとりはバ。ひゆゝぬ事みで
よひらりきら。大納言の北をいめて左大臣おり
きら。本院めでて語ひきら業すもだらりめて
かさらわりさ給めでてくいうしさ人めてぞ北
りしきらバ。おもバ大納言の北方めでてさよ
しばさ語ひて。ゆりしさおりわりきらめ
其比をきゝの云来の作みこのまごく宮や
まうとわりさりきら。わざなる平仲（へいちう）とそいひ
まは。其比の人の娘。文ばら人。こねなんあら
つまきりさし大納言の妻ハとしごろ業作ありび

てらなどいふ事ハきくのまひて。誠にやいりで。
さんとおかしきはかに。冬の月わくつきまち夜。
しきの庭乃まじりにきはかに。何とかなれせ乃
ようづりしのよかどに。秋ヒ文にもりがらじ
きらぬのねざらりのはめぞに。おもくて道くあま
まてとひのまふやうにてにいさん事かくさいの
女へてらうみたま女の中に。めでらハヽれ
うわなとといのまへハ。宝仲よまらハ。おまへにて
よへハうしうかていうて事なまで。秋ま
ことにあそで。おりのまくにいへて。おわせて好れ
ばかなり。嵐大納言れの方へて。せにねれぞ記

関白殿人におもはれて侍れた。まことなり侍り
されバして。それはいかにして。みなひと
何かと人ハそとにさまして。ひと人はきりりし
が中しつ。花もく人にそらは。いちらは能
さ事にあらんおもひはとさうかく侍り。とおら
あくかずんて。いかせてと侍ること。かくかさぐら。見
やひさうと侍りて。いろしく思ひて。ふ春も
みみ都にてあらん侍らうらまけてとえあり
侍るまでさここに中まではわしき。ぎはとし
給ひまでなりなとて。さしひての給ひま給さ
てらのうちに。いそでしく人ハ見んとおかれ心。

ふく成まさりにけれバ。其後よりハ。此大納
言をうらみたりしかバ。事にふれてかしこ
まりきこゆるのみ。大納言ハつれなく。
かうげなき物からそでのひま成。女三の宮で
家ハありてそでと。心の中にかなしく思ひける。
かくてむ月に成りぬ。三月ばかりまゐらんとの
給ひまなよし成。大納言さゝ給ひて。家ハ
絶みだれ。御まうけのかんし給ひまな。霜月三
日に成て。さるべき人と遊給ひさらし
て。此大納言の家におはしまされバ。うれしび物
にあり給事かぎりなし。おもふ事どもあり

きこゆれど。さにことりとみえず。さはから
らずかりにも目出度ね。うちひあそび給ふ事
おもしろく。そぞろさきまでめでたし。此おき
ど。御ちゝよりはじめ。めでたく給へる御ありさ
まのよのつね成じめでおぼされバ。弟
の人くめで給けるまゝにまつりみなある事にて
し。此の方ハ。おとゞのたゝ成ことぞの方より
のぞれのまかに。おとゞのかたらけるに。次いでに
めかひより給人にすぐれ給へる御かん給ひ
て。我身のすぐせこそうくおぼゆる。いかなる
人が御人にそひてあらん。業もふかくさ

ミ人ゆくへしらぬ。事なれバいとゞしくお
ぼしめ。身のをに成なく。なうくわんじぬるへる
ふじおもじかくらうひおもびのびてじきそぐ
まの方ばちりめゆみんをこ世行ひ。ぎり
ぎにいきんかさなく。きそれのうらさへこらふか
くかし忍てみんおきせのふせ。いりゆおがきら
むといそぎけりしか。ふ經ふ。來やうくけ
ゆくみ。落人えいゆらびとそれかさぬぞて。
彌たつふれのま事かぎりなし。海り治ひ
あんとさ御經ふ。大納言よのふハ。法車にてみ
さししせてきれ。てく忍り世治へみらと
やよ人バ。いとしくびんなき事。いそでさる事候
む。いそく忍ひなバ。此夜ゆそ候らめ。御忍ひさめ。
てまり出なんとの給ふ。しかんざらめと。
きかめてもれ事なりとて。たゝしせふ。御車ひ
かくしのとくにませさせ給かぜん。引出ぬゆ
いらしさるふけバ隠を夜明今あざさり出
くるま。おくじ。大納言ゆやよの。かう忍ひのは
いでゆ。忘れ事やいびんなき事ゆてさうまへ
ぞかく忍ん。忍んのためゆ東ろばいえし
とおがさば。かぎりなく。やしき事なりん出
おぼしそ行るめとの行へハ。大納言ば。いそしう

忽ちはんとめいがくおり。これしくおがゆう
みかくの様なり。我君ハ、ぞんひさしくべにこそ
いらしくおがみぞ。おとゞみおもんじも。かぐら
の人ハ、えやかに様つゞくんだ。おりめにかけれ。
みその中は常に刀んやり様とかなと。とぐら
しくハおがしは。おあしくハ、がしはねをとらさ
りをはさともみせなんりしと。殊ぐらひさら心
まもで　おがしても。おきかのとしゆいかがは
物こそさふく、是は引出物にまゐらせて
屏風は、なしくしてきそれもちをしいを
しぐふの方れ被はをりてりせてこれにさふ

ふとま様へバ、職にまゐりしはかひありて、いまこそ
これしく侍りとて。おとゞよりて、女房へ様ひあれ
む。大納言ふらのさんて。こと服京はいまだ出様
ひ給。おとゞハとみにいで様りしこのさまへ。上達
部めはよびせ。ひらはつさて。おもひいませんへ。お
ハらかくれて、いろおもきでみきそんとおぼれ
人をおり。おとゞ、いまだ職にいらしく殊ら。車
ませぐさらおかしこの様ふけゆ。御車寄南
おしらはは。人とさりてさしくせ門。大納
言よりて。御車のまゐれをとりあげ様て。おとゞ
かの方はうさいざれて。車にからのせてや

忽ちはんしとめいがくおり。されらくおがゆら
みかくの給へな。我等ハじきひさらくハにこそ
いらしくおがめど。おとゞみおもしも。かぶら
の人ハ。えゝやとら給ひつゞらん。ちりめかかけれ。
みその中の常子ゆ刀んやり給ふなとぞ。とづら
りしくハおがしば。おわずしくハがしは程とらさ
つきも如ことみせなまんりしと。酔ぶるひさら心
ありまで。おがして。おききかのをとしゆ。かたは
物こそさふし人ハ。竜の川出物ゆまでしをとて。
唐風の殊にしそて。きゞれちらをしいま
て。此の方れ袖のそりて川しせて。これゆさふ
らふと給ハ。織ゆまりりしはかひありて。いまそて
これしく待まさて。おとゞよりて如く給ひ哉れ
む。大納言これのまそて。つと唐京のいま程出給
ひ給。おとでハとみゆいで給ひしとのさま。ハ上達
部めのろぜ。けらのつさて。おもひやすへ。お
いらかくれてハいふおね事でみなえんとおもれ
人をおり。おそびバ。はん織ゆいらしく酔しら。車
よせくぎらがかしとの給ふ所ゆ。此車庭の閑
おしらはの。人てさりてさしもせり。大納
えぐりて。此車のまぐれをとげ給ふ宮そで
かの方のりさいぶれて。車ゆぶらのせてや

ぐて。ばござて帰給ひぬ。大納言ぢやうぢなくてや。かんおなじ。我かくされてとなんいひけるひまば。御車寄りおろさせて出給ひぬ。大納言門に入て。枕床とりてふし給ひぬ。いとくるしくおぼひかきれバ月ごろあさ。ならはしくておもくごゝにやうく醒（さめ）て。見れやうかりしとおぼゆまバ。ひが事にやありんとまで。おぼして。女房に。うへ人とをひ給へバ。ありしやうおぼに。いふかひしう。されしといひおかう拘りうひかきりて。酔の心とくひおかうかくれきさぞも人やわがとおこなとたしかなく。

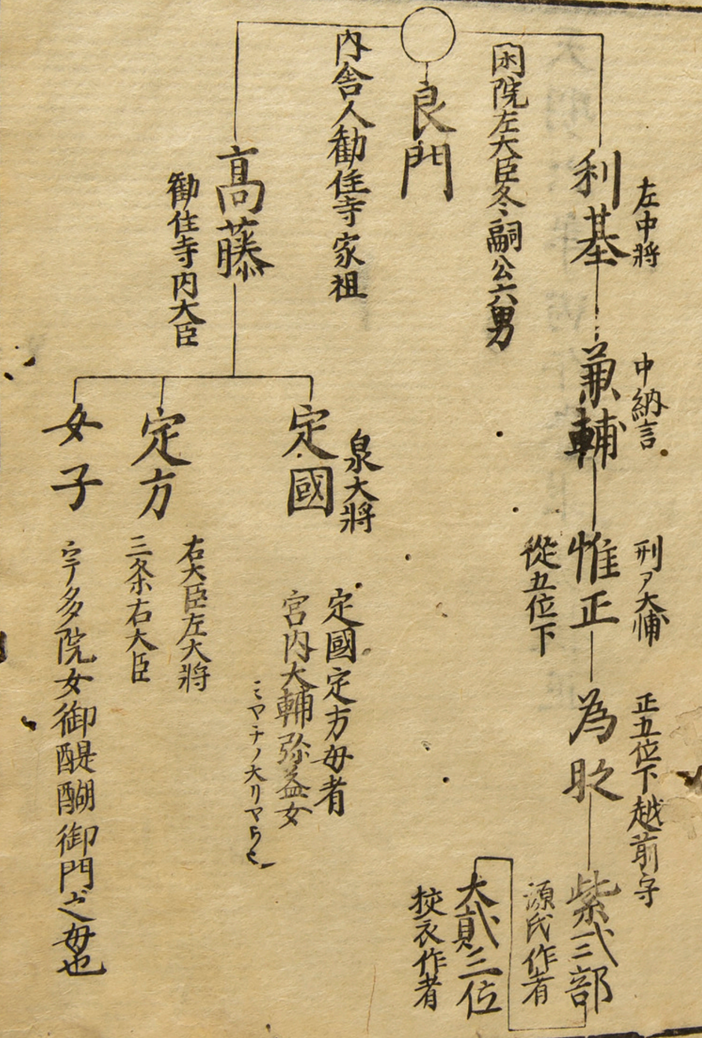
かくちへことゞらりんべきやうとなし。女君さいとひのきはなめりとおぼすにも我は更らとおぼしひらしきそくのみこしをも給うてらやしくがしくまうくぐ人めめでゝ。心としさう事ともとりせて。心のうちめへ。ゑりがくまうしくなんおぼしきれ。たのおもじへ。我（わ）ととみめそおりして。対にまうしひとへてをもと給ふみなてやくみたゆる。なかく。いうしくなんおぼしまは。かの方の心もへ。此の人はむ門とおりひつうめ。かくはめでたく人めそひておろは。我身のすぐせうしくおりひきは。それの

人ハ。我ばかりかくなさじとせひらりしけで。あきれさせりひおもしれきける。事件をとゞめむつりしきにこそあぐさるにまりあくしてあひしまつれが。ほか人にそひかまへばせひ出べこゝにおしぬに。又我がくばなしあれとみなやゝん。ひまもなくとをそあかしけの人も。何事にかとかくしと見をそておぼべきにとおしばかりてわが顔に。いくしきがかれのでうけりぞ。の子中納言にて。本院の中納言あれたくと云ハじ人なりきら。織にゐまゐり。おちゞかの方車にの也殺しけるに。下かさねのきりとりて。清車にいるやうに。車行ちりて。りきつけて。ばしつけてさりぬきぬおもしろみんば織にまゐり。かの方さまみえばに。袖の下にみるく紅ばかりそやりてやしつけくらば。おやしとおぼひてこれバ。かぶなる人のあゆく地ぞそひつゝねの紅の出添ぶいるのバにこそおれなゝしてぬきととおんあのまにば。車にのりしかど。下がさねのきりに入し八。見にこそ有まれとおかしきや。又おなじ人のかへらし八。見のかいかゞに書て母にやりたまれさてやりちりきばとゞくれ着せし我が衣どもいかゞ時きハいかに契りし名残なん

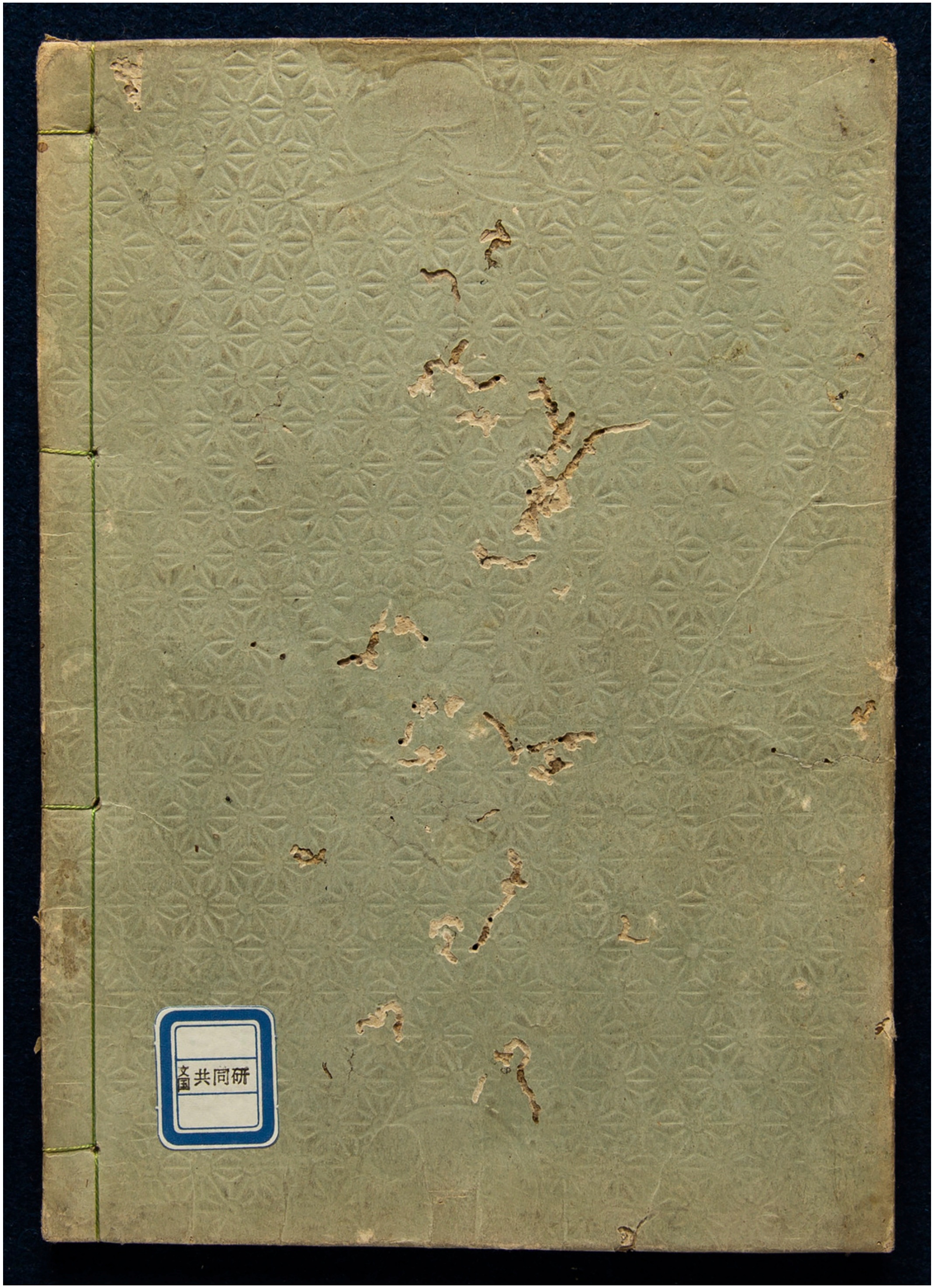
此哥こそ。ちどれかいかに書て。母にみせなれ
とよみ。みな人々きゝて。あいらしくかきて。又
かいかにかきてみし
しれかてされ紫きん宮之おことさらにたゞ給秋ハれ

寫本云
有宇治拾遺行世這箇物語未有鏤梓是故乞假或家所秘之本使滿直謄閲多舛差只追陶靖節之遺風不求甚解暫俟他日要考同異云爾

高藤系圖


良門
内舎人勧修寺家祖
利基
閑院左大臣冬嗣公六男
左中将
兼輔
中納言
雅正
刑ア大輔
従五位下
為時
正五位下越前守
紫式部
源氏作者
大弐三位
狭衣作者
高藤
勧修寺内大臣
定國
泉大将
定國定方母者
宮内大輔弥益女
ミヤナノ大リヤらく
定方
右大臣左大将
三条右大臣
女子
宇多院女御醍醐御門之母也

天明六年丙午春求版校正



国文共同研